

小学校教師の授業力の向上に向けた実践的研究 —新人教師を対象として—

本学教育学部 林 修
本学附属小学校 則藤 一起
田辺市立田辺第三小学校 湊本 祐也
和歌山市立雑賀小学校 塩路 文哉
山岡 大祐

I はじめに

我々の経験から、新人教師の中に「生まれ持った教師」と思われるような優れた資質・能力を備えた先生に出会うことがある。これは「優れた教師は突然に優れてくるのではなく、新人の頃から優れているものである。」(Bereiter & Scardamalia ; 1993) とする言葉にも表れている。このことから、優れた教師を育てていくためには、新人の頃から優れた教師を探し出し、なぜそうした優秀性を検討することが求められる。

そこで、本研究では、その一端として優れた学習成果(態度と技能)を取めた2名の先生を対象に、「自分を変えた子どもとの出会い」、「先輩教師との出会い」についてアンケートを行い、それぞれの先生の優秀性とその背景について考えてみることにした。

II 資料の収集

1. 対象教師(新人教師の限定)

松尾(2006)は、Ericsonの「高いレベルの熟達者になるためには10年の準備期間が必要となる」とする「10年ルール」を一般企業の営業調査のデータから検証した。

また、体育分野では、清水・辻野(1976)が教職経験年数1~30年の小学校高学年(5・6年生)を担当している教師60名を対象に教職経験年数と学習成果の一つである態度得点の関係について検討した。その結果、教職経験年数5年前後までは態度得点は低いが、教職経験年数10~20年の間で高まってくると報告している。

これらのことは、新人教師の教職経験年数が10年未満であることを示すものである。

また、厚東・梅野(2008)は、小学校高学年(5・6年生)教師を対象に、体育授業に対する反省得点と教職経験年数との関係を検討した結果、職経験年数8年までの教師は反省得点と態度得点との間に関係性が認められなかったが、教職経験年数12年を境に、反省得点が漸増していく教師と逡減していく教師に分かれ、前者の教師は子どもからの評価(態度得点)が高まるが、後者の教師は逡減傾向にあることを報告している。さらに、教職経験年数が3年までの教師は自身の授業をどのような観点から振り返ればよいのか判然とし難い様態にあるとした。

これらのことから、教職経験年数4~8年目にある方を新人教師とすることにした。

これらを踏まえて、①教職経験年数が4年~8年、②学習成果(態度得点と技能)を高めた、の2点に合致する教師2名に協力を依頼した。その結果、教職経験年数7年(以下、A先生)と8年(以下、B先生)とから協力を得ることができた。

2. 資料の収集

(1)教材(バウンドゲーム)

図1は、今回用いた教材(バウンドゲーム)のコート図を示したものである。これは、3年生のネット型ゲームとして身体教育研究(2017)が開発したものである。

この教材は、ネットの代わりにコート中央にサークルを設置し、そこにボールを叩きつけてバウンドさせながら攻防を展開するゲームである。この時、バウンドしたボールを相手チームがキャッチできない時に自チームの得点となる。

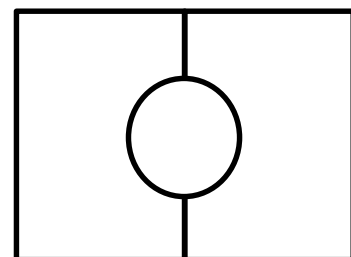


図1 バウンドボールのコート図
(武田・佐々, 2017)

(2) 学習成果の確認

① 態度得点からみた学習成果

単元前後に、奥村ら（1989）が作成した小学校 3 年生用の態度尺度を用いて、態度測定を行い、体育授業に対する子どもの愛好的態度を測定した。

② 技能から見た学習成果

単元の 1, 4, 9 時間目に授業中の試しのゲームを VTR に収録し、ゲームパフォーマンスの変化を捉えた。具体的には、単元経過に伴って、「1 得点ごとのラリー回数」、「ノータッチ攻撃の成功率（全得点に対する、相手チームの子が触れることなく得点できた本数）」、「キャッチミス回数」それぞれの平均値の変化を捉えた。

Ⅲ 実践の結果と考察

1. 態度測定の診断結果

表 1 は、2 人の先生の態度測定の診断結果を示したものである。

2 人とも、単元後の総合診断の結果が「高いレベル・成功」であった。これは、子どもたちが、それぞれの先生の体育の授業に対して、好意的かつ主体的に取り組んだことを示す結果である。

次に、2 人の先生に共通して「標準以上の伸び（図中の㊦印）」を示した項目をみると、「1. 授業時間の延長」、「5. 体育に対する好嫌」、「8. はりきる気持ち」、「9. 授業の印象」、「10. 精神力の育成」、「11. 課題解決への意欲」、「13. 運動の爽快感」、「14. がんばる楽しさ」の計 8 項目が取り出された。

これらの項目内容から、両クラスの児童には、「体育の時間にはいつもはりきって運動に取り組み、仲間とともに課題を解決し、運動が上手にできるようになった楽しさや爽快感を感じた」といった心情が育っていたことが読み取れた。

表 1. 態度測定の診断結果

被験学級		A学級			B学級		
		単元 始め	変化	単元 終わり	単元 始め	変化	単元 終わり
よろこび	1 授業時間の延長	○	↗	○	○	↗	○
	2 活動するよろこび		↗	○	○		○
	3 挑戦する態度	×			○	↗	○
	4 授業時数の増加			○	○		
	5 体育に対する好嫌	×	↗			↗	○
	6 積極的な活動意欲	○		○	○		○
	7 運動による解放感		↘			↗	○
	8 はりきる気持ち		↗	○	○	↗	○
態度スコア		C	4	B	B	4	B
評価	9 授業の印象	×	↗		×	↗	○
	10 精神力の育成	×	↗		○	↗	○
	11 課題解決への意欲		↗	○	○	↗	○
	12 仲間との協力	○	↗	○	○	↗	○
	13 運動の爽快感		↗	○	○	↗	○
	14 がんばる楽しさ		↗	○	○	↗	○
	15 運動の工夫		↗	○	○	↗	○
	16 深い感動	○			○	↘	○
	17 仲間への思いやり	○		○	○	↗	○
	18 主体的な態度	×		○	×		
態度スコア		C	5	A	A	5	A
単元後の診断結果		高いレベル			高いレベル		
		成功			成功		

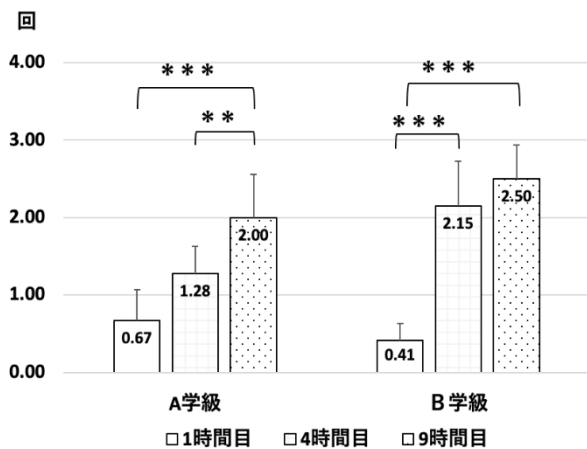


図 2. 平均ラリー回数の単元経過に伴う変

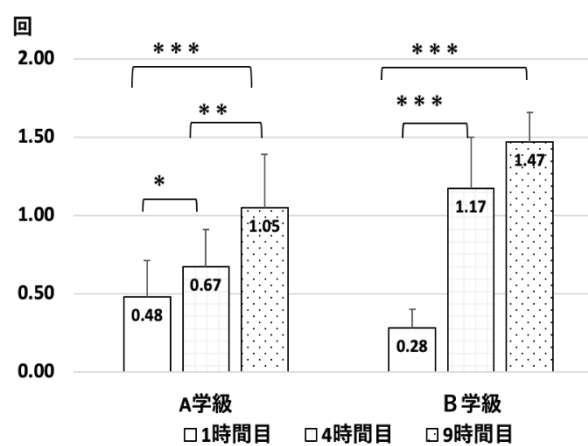


図 3. 平均キャッチ成功回数の単元経過に伴う変化
(※キャッチ：頭上の位置でのキャッチに限る)

2. ゲームパフォーマンスからみた技能の結果

図2は単元経過に伴う平均ラリー回数の変化を、図3は単元経過に伴う平均キャッチ成功回数の変化をそれぞれ示したものである。

いずれの学級においても単元経過に伴って平均ラリー回数並びに平均キャッチ成功回数ともに有意な増加が認められた。

こうした結果の内実を確かめるために、連携プレイ中の個人的なプレイがどのように変容したのかについて検討することにした。

図4は、攻撃面でのノータッチ攻撃（防護者の隙をついた得点）とミスによって相手に点を与えたプレイ（キャッチミス、アタックアウト、バウンドの高さ不足）の平均回数の単元経過に伴う変化を学級別に示したものである。

両学級に共通して、キャッチミスの有意な低下とノータッチ攻撃の増加が認められた。これは、ボールの下に素早く移動して、正確にキャッチすることができるようになるとともに、相手の隙をついてアタックできるような「トスアタック」の連携プレイが上達したことを示すものと考えられる。ただ、B学級のアタックアウトの回数が有意に増加してしまった。これは、ビデオ観察から、B学級の子どもたちがラインぎりぎりを超えて強くアタックするようになったことで、結果的にコートを超えてしまったことによるものであった。

これらのことから、両学級ともに総じて子どもたちがこのゲームを上手に展開できるようになり、これが先の態度得点の著しい向上につながったものと考えられた。

そこで、こうした新人教師であっても学習成果を著しく高めた先生を対象に、これまでの教職経験を振り返ってもらうことで、その背景を探ることにした。すなわち、「自分を変えた（育ててくれた）子どもとの出会い」と「同じく教師との出会い」の2点について記述してもらった。

3. 二人の先生の振り返り

表2は、二人の先生の振り返りに記述された内容を抜粋したものである。

まず、A先生の振り返りからみると、『きちんとさせないといけない』とっていました。特に初任だったということもあり、力んでいたところもあると思います。できるだけ自分の枠の中に入れないといけないと無意識に思っており、枠からはみ出た子供をまた枠の中に戻そうとする」という記述が見られた。大学で学んだ教育方法に子どもをあてはめようとした考えをT君との出会いによって打ち砕かれたのである。そして、自身の指導力の未熟さを感じ取ったのである。このとき、A先生は、うまく指導できない原因を「T君には発達障害があるから」と子どもに転嫁するのではなく、T君を学級の中心に据えることができなかった自分の責任として深く反省していた。

次に、B先生の振り返りから、「子どもが『できる』ようになるためには、運動感覚を養うことと正しい運動の行い方を教えることが必要であることに気づきました。」「それぞれの学年の学習内容を適切に指導しなければ、できるはずの経験もできない経験になってしまい、運動が苦手な子どもを増やしてしまうことがわかりました。」などの記述が取り出された。こうした内容は、A先生と同様に、「できない子、つまづいた子」との出会いから、自身の指導力の未熟さや学習経験の積み重ねの重要性に気づく内容と解せられた。

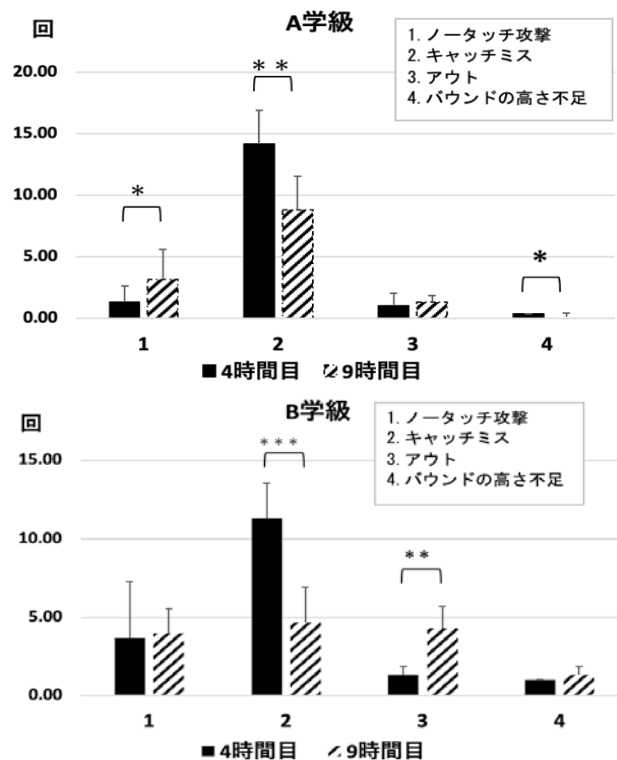


図4. 連携プレイに関わる4つの個人的技能の平均回数の単元経過に伴う変化

表 2. 二人の先生が振り返って記述された内容

【A 先生】

◆子どもとの出会い

何よりも発達障害と愛着障害のある児童 T くんとの出会いです。

初任の頃は、子どもたちを「きちんとさせないといけない」と思っていました。特に初任だったということもあり、力んでいたところもあると思います。できるだけ自分の枠の中に入れないといけないと無意識に思っており、枠からはみ出た子供をまた枠の中に戻そうとする…(中略) T くんは殴る暴れる暴言は日常茶飯事、私に対しても蹴ったり髪を引っ張ったり…(中略) T くんはどう関わってあげればいいのかかわからずに 1 年が過ぎてしまいました。その年は何もできず過ぎてしまいました。ただその時に、クラスの中で T くんを生かしてあげること、教室の中で居場所を作ってあげることの大切さを実感しました。またルールの中で自由にさせること、子供を信じることも大切だと感じました。

◆先輩教師との出会い

上にも書いたように「子供たちをきちんとさせない」という気持ちが初めのころはとても強かったように思います。しかし、先輩の先生の話を知っていると、子供の良いところやおもしろいところを職員室で話していることが多く、自分は子供たちの気になるところばかり見てしまっていることにハッとさせられました。また、授業を覗きに行かせていただいたとき先生がとても楽しそうだったのが印象に残り、自分の授業を振り返ると楽しめていないな、と思いました。そのときに教師自身が「楽しむ」ということが大切であるということを知りました。子どもと一緒に楽しむことができる教師でいたいと思うようになりました。

【B 先生】

◆子どもとの出会い

あらゆる球技や陸上運動が得意だが、水泳は苦手であった子ども I・M との出会いです。この出会いにより、運動神経が良いだけでは、できない運動が出てきてしまうことを知りました。その子どもに水泳を教える中で、水中での感覚にあまり慣れていないことや水中での動き方を知らないことが理由で泳げていないことが分かりました。(中略) 体育の授業で子どもが「できる」ようになるためには、運動感覚を養うことと正しい運動の行い方を教えることが必要であることに気づきました。

(中略)

開脚後転ができない 5 年生の子ども Y・N との出会いです。5 年生のマット運動の第 1 時のことでした。中学年の内容の振り返りとして、開脚後転をさせたのですが、この子どもはできませんでした。(中略) それぞれの学年の学習内容を適切に指導しなければ、できるはずの経験もできない経験になってしまい、運動が苦手な子どもを増やしてしまうことが分かりました。この出来事では、系統性の大切さを学びました。

◆先輩教師との出会い

一人目は、私がこの仕事を始めたときからお世話になっている先生です。先生からは、2 つの事を学びました。1 つ目は、よりよい仲間づくりの術についてです。学級目標を全員で時間をかけて考えることにより、1 年を通して協力し合える集団になることや少数意見を大切にしながら学級会を進めさせることにより、お互いの事を理解し合える集団になること等、たくさんの術を教えてくださいました。2 つ目は、お互いを高め合うことのできる集団づくりです。

(以下略)

二人目は、同じ地区内で体育を担当されている先生です。その先生は、我々の体育の授業力を向上させるため、「学習指導要領解説の大切さ」「体育授業における教師の役割」「研究授業」等、様々な研修を企画、実践してくれました。これらの研修に出席している内に、自分の知らない知識や技術がまだまだあることを知りました。

(以下略)

これらの記述は、「初心者原則論にのっとりた行動はかなり限定され、柔軟性がない。そうした困難さの中心をなすのは、初心者がその状況に直面した経験がないために、実践を導く原則を与えなければならないということである。しかし、原則は実際の状況で何を最優先させるべきかを教えてくれる訳ではないので、原則に従うことが実践を成功させるのに有効とは言えない」(Benner:1992)とする新人教師の特徴そのものである。しかしながら、2 人はその段階に止まらず、指導の未熟さを自分自身の責任として受け止め、子どもとの関係をどのように編み直せばよいかという前向きな姿勢を有していた。

Schöne (2001) は、「専門家の知恵」の中で「クライアント(ここでは子どもと読み替えてみるとよくわかる)が抱える複雑で複合的な問題」について「クライアントとともにより本質的で複合的な問題に立ち向かう反省的実践者」が有する「行為の中の省察」という考え方を示している。これより、

上記2人の振り返りは、Schöneが示す「反省的実践者」の見方や考え方に通じるように考えられる。

続いて、先輩教師との出会いについての記述を見てみると、A先生からは、「先輩の先生の話の聞いていると、子供の良いところやおもしろいところを職員室で話していることが多く、自分は子供たちの気になるところばかり見てしまっていることにハッとさせられました。」ま「先生がとても楽しそうだった」と記述されていた。つまり、子どもの見方、捉え方の偏狭さや自身が楽しめていない現実を認識していた。松尾(2011)は、経験学習の立場から、経験から学ぶ力のモデルとして「ストレッチ-リフレクション-エンジョイメント」のサイクルを示している。つまり、A先生は先輩教師から実践をエンジョイすることの大切さを学んだのである。

また、B先生は、ある先輩から「よりよい仲間づくりの術についてです。学級目標を全員で時間をかけて考えることにより、1年を通して協力し合える集団になることや少数意見を大切にしながら学級会を進めさせることにより、お互いの事を理解し合える集団になる」といった学習集団づくりの知恵を学ぶとともに、もう一人の先輩から「自分の知らない知識や技術がまだまだあること」を教えられたと記述している。これらのことから、授業づくりにおいて学習集団づくりが基盤であること、そしてより多くの実践的な知識を身につけることの必要性を学んだのである。

IV まとめ

今回、新人教師(教職経験年数8年以下)の中で、学習成果(態度と技能)を高めた二人の先生の振り返りを通して、その優秀性について検討した。

その結果、2人の教師に共通していた点として、自らの指導力の未熟さを振り返り、子どもとの関係を新たに編み直そうとする姿勢を有していたことが考えられた。すなわち、初任者の時代から、教員養成段階で学んだ原則論にのっとり指導することの限界を知り、先輩教師からの助言を素直に受け入れ、実践的な知識(実践の中でしか身につかない知識と技術)を身につけようとする姿勢を有していたことである。こうした姿勢を生み出したのは、自分を振り返る力(省察する力)に優れていたことによるものであり、ここに新人教師としての優秀性の一端があるものと考えられた。

<参考文献>

Bereiter,C.& Scardamalia,M.(1993) Surprising Ourselves,Open Court Publishing Company.

松尾睦(2006) 経験からの学習-プロフェッショナルへの成長プロセス-, 同文館出版. Pp.87-99.

清水美千子・辻野昭(1976) 清水美千子さんの調査結果から, 小林篤(1978) 体育の授業研究, 大修館書店. pp.210-216.

厚東芳樹・梅野圭史・林修(2008) 「教職年数という物理的条件が教師の反省的思考に及ぼす影響-小学校高学年(5・6年)担任教師の場合-」, 日本体育学会大会予稿集 60, p.278.

奥村基治・梅野圭史・辻野昭(1989) 「体育の授業に対する態度尺度作成の試み-小学校中学年児童について-」, 体育学研究, 33-4:309-319.

武田直子・佐々敬政(2017) 「バウンドゲーム-すばやく, ボールの下に入ろう-」, 梅野圭史(編著), 小学校ボールゲームの授業づくり-実践理論の生成と展開-, 創文企画. Pp.258-263.

Benner,P.(1992) 井部俊子・井村真澄・上泉和子(訳), 看護論-達人ナースの卓越性とパワー-, 医学書院. Pp15-16.

Schöne,D.A.(2001) 佐藤学・秋田喜代美(訳), 専門家の知恵-反省的実践家は行為しながら考える-, ゆるみ出版. Pp.1-11.

松尾睦(2011) 職場が生きる人が育つ「経験学習」入門, ダイヤモンド社. Pp20-23.